『世界の日本語教育』3，1993年3月

〈公募論文〉

ラジオニュースの型と日本語教育への応用

岡　崎　志津子*

キーワード：聴解教育，ラジオニュースの型，ラジオニュースの特徴，ニュースの語彙

要　旨

ニュース教材の効率的な導入・利用方法を考えるために，1989年8月から91年3月までの間，朝晩2回ずつNHKラジオニュースを録音し，その一部を文字化した．

1991年度には，スクリプトの分析結果にもとづくシラバスを東京国際大学留学生別科の語彙授業に，また分析結果にもとづいて試作した教材を東京国際大学学部留学生の聴解授業に用いてみた．1年を通じて行ったテストの成績を統計分析したところ，ニュース指導の効果を裏づける結果を得た．

本稿では，まずラジオニュースから取り出したニュースの型・特徴的語彙をまとめ，次に1年間の実践結果をふまえ，ラジオニュースを日本語聴解教材として用いる方法について考察する．

はじめに

予備課程，学部を問わず，学生に「どんな日本語力をつけたいか」という内容のアンケート調査をすると，「ニュースが聞けるようになりたい」という答えが上位を占める．もっとも，「ニュースが聞ける」という内容には差があり，日本語学習期間が1年未満の学生は，「ニュースでどんなことを言っているか知りたい」と答えるのにたいし，それ以上の学生は，「もっと正確に全部聞きたい」ということのようだ[1]．しかし，いずれにしても，学生にとってニュースは「難しい」ものであり，そのため「ニュースを聞く」ということを日本語学習の一つの目的としていると考えられる．

一方，教師の側でも中・上級の聴解教材としてニュースを盛んに利用している．しかし，筆者自身の経験からいうと，かなり時間をかけて生教材を用意し，授業に利用しても，その教材や授業が，学生にとって次にニュースを聞くときのステップになっていないのではないかという思い

* OKAZAKI Shizuko：東京国際大学商学部専任講師．

[1] 東京国際大学における1992年度のアンケート調査では，44人の学生のうち29人が聴解の時間にニュースを聞きたいと答え，そのうち21人はニュースはだいたい分かると答えている．

が常にあった．そんなとき，学部留学生の一人から，自宅でニュースを聞くときのニュースの聞き方を教えてもらいたいという要望があった．語学の授業，特に中級以上の授業は，その授業時間内に知識を教えるというよりは，学習者が将来自分自身で学習していく際の指針を与えるようなものであるべきだということがよくいわれ，そのような観点から授業計画をたてているつもりではあったが，ニュース指導に関してその意図はうまく機能していなかったということになる．

これをきっかけに，効果的なニュースの指導方法を考えるため，また学習者が自主的に学習していくときにも役立つような教材を作るために，まずニュース分析を行うことにした．

なお，本稿でニュースというのはラジオニュースを指し，テレビニュースは含まない．一般にテレビは映像や文字があるので，理解しやすいといわれている．しかし，一方では説明の文字が同時に出る場合，「学習者の情報処理の能力を越えてしまう可能性」[2] もある．母国語なら聞きながらテロップを読むことで理解が助けられても，外国語学習では音声とは違う情報を読むということで，かえって聞くことに集中できない場合も多い．

また，後述するように，一つ一つのニュースにリードというニュースの内容をまとめた部分があるのがニュースの一つの特徴であるが，菅野・石野 (1969：3) の研究では，テレビのリード部分はあまりはっきりしなくなって，「全体の文章の中で独立性を失い，形式上も連続した文章の一部になってしまっている」ということであり，松岡 (1990：147) は，テレビの場合は画面にタイトルが出るために，リード部分は「長めで説明的になりやすい」といっている．ふつうラジオニュースとテレビニュースはあまり区別されないが，映像や文字を意識したニュースと音声だけのニュースでは違いがあると思われるため，ここではラジオニュースだけを取り上げた[3]．また，ラジオニュースの中でも事実報道，調査報道を中心とした．

ラジオニュースだけを取り上げた理由には，上記の理由のほかに，留学生の中にはテレビを持たない学生も多く，一般的にはラジオニュースを聞く機会の方が多いこと，さらに教材化したときに自宅学習のためには音声テープのほうが利用価値が高いというような実際的な理由もある．

1. ニュース分析[4]

1-1. 分析の具体的目的

ニュース分析に関しての先行研究については，鈴木・横田 (1992：91-95) にまとめられているが，それ以外にも，NHK 放送文化研究所によって長年にわたりニュース分析が行われている．

---

[2] 竹蓋(1989：104)『ヒヤリングの行動科学』，研究社．

[3] 放送文化研究所の最上勝也氏は，昭和40年代以降からはテレビが主体となり，テレビニュース原稿をそのまま使用することもあるため，テレビニュースとラジオニュースの差はあまりないというご意見であった．

[4] このニュース分析は小西正子との共同研究である．

それらの研究では放送のことばを聞きやすくするために，ニュース以外の文と比較した分析が多い．本研究では，それらを参考にして，現在放送されているニュースを実際の聴解授業にそのまま適用できるようなニュース教材の形にまとめることを目標に，分析を行うことにした．

学習者が実際にニュースを聞く際にどのような聞き方をしているかを調べてみると，知っている語彙を拾うのはもちろんであるが，息つぎの時の声の調子や出だしのことばでニュースの区切りを知ったりするなど，ニュースを識別する手掛かりを求めているようである．そこで，ニュース番組全体の流れの中から一つ一つのニュースを識別する何か手掛かりになるもの——たとえばニュースの切り出しやクロージングの言い方——を取り出し番組全体の構成を知ること，一つ一つのニュースの流れの特徴をつかみ，「ニュースの型」として取り出すこと，決まった「ニュースの型」に特徴的な語彙があるかどうか調べること，などを具体的な目標とすることにした．つまり，ニュース全体の文の特徴だけでなく，分野別またはもっと狭い範囲でニュース文の特徴をつかみたいと思ったのである．本稿では，気象・事故・経済情報など分野別に分けたニュースをさらに分類したもの(たとえば気象を長期予報，台風というように分ける)を「ニュースの項目」と呼ぶことにする．

1-2. 分析の手順

分析の資料として NHK 第一放送の午前6時・7時・午後7時・10時のニュースを録音した．続けて録音したのは，1989年8月から91年3月までで，その後は必要に応じて録音した．テープにとったものについては，まず，すべてのニュース内容を書き出した項目リストを作った．その中から学生の日常生活に必要なもの，日本の文化・社会を理解する助けになるものという基準

表 1 ニュース項目

分 野	項 目
1. 気象	天気予報，長期予報(週間予報・三ヵ月予報)，梅雨入り，梅雨明け，台風，注意報，世界の天気
2. 事故	列車事故，自動車事故，航空機事故，船の事故，水の事故，山の遭難
3. 災害	火事，地震，噴火
4. 経済関係	卸売物価，消費者物価，外国為替・株式市場，経常収支，経済白書，日銀短期経済調査
5. 交通	列車運転状況，空のダイヤ
6. 人物往来	
7. 調査結果	
8. 社会・文化	年中行事，伝統行事，催物，スポーツ，その他社会状況を表わすできごと

で選んだ八つの分野(表 1)のニュースを書きおこすことにした．ただし，録音したニュースすべてを書きおこしたわけではない．文字化するかどうかという選択の基準は，内容があまり特殊ではなく学習者が興味を持てるものということにおいた．録音が長期にわたったため，同じ行事が行われる日(たとえば文化の日，体育の日など)の原稿が比べられて参考になった．

書きおこした原稿をもとに語彙・表現をカード化した[5]．カード化の際には，まずニュース全体の語彙・表現をカードに採り，次に下記のような分類によりカードを採りなおした．分類の方法はニュース項目によっても違うが，まず後述するようなニュースの型にそった分類をし，次に文の意味(伝達表現)の上からの分類をする．「航空機事故」の例をとれば，ニュースの型にそった分類というのは，「情報源・時の表現・場所の表現・関係者・関係機関・航空機・事故(事故の種類・事故の状況)・被害・数の言い方」などで，文の意味からの分類というのは「ニュースのオープニング・クロージング・つなぎ・伝聞・原因・(事故に対する)対応・予定・推量・判断・意向」などである．

1-3. 分析の結果

1-3-1. ニュース番組の構成

ニュース番組の構成を見るために，語彙・表現のカード化とは別にニュース番組の流れを10回記録した．

ニュースの文には，一つ一つのニュースの冒頭にそのニュースの内容を要約した文をおくことが多い．これは，「見出し」「ヘッドライン」とも呼ばれるが，「NHK アナウンスセミナー」(1990: 106-112)，「ニュース原稿とトークの実際」(1990: 6) にはリードということばが使われいるので，本稿でもリードと呼ぶことにする．ニュースには，15分以上の長い番組と5分ていどの短い番組がある．ニュース番組全体の構成についていえば，長い定時ニュースの場合には，その日の主なニュースのリード部分を，はじめにいくつかまとめて読むのがふつうである．午後10時の NHK ジャーナルでは，この部分を男女のアナウンサーが交互に読むので非常にわかりやすく，リード部分だけを教材としてとりあげるのに適している．

時間や日によって定時番組のニュースの流れも違っているが，午後7時のニュース番組の構成については，表2を参照していただきたい．

1-3-2. ニュースの型

ふつう，ニュースの型といわれているものに，「逆三角形型」がある．これは一番はじめにそのニュースの最も大切な情報をまとめて伝え，しだいに細かい情報に移るというもので，新聞を

[5] カード化には小西があたった．

表 2 ニュース番組の構成

例： 午後7時の定時ニュース.

切り出し

こんばんは 7時の NHK ニュースです

ニュース全体の見出し（その時間の主なニュース項目の概要）

(1～3 ぐらいの項目) これがこの時間にお伝えするニュースの主な項目です*	* 言わないこともある

ニュース

初めに*	* 何もいわないですぐにニュースに入ることもある
次に*	* いつも二番目のニュースのときに使うとはかぎらない

終わり

(主なニュースを繰り返す*)	* 言わないときのほうが多い
ここまでのニュースは○○がお伝えしました ○○でした	

(一点チャイム)

地方のニュース

では続いて○○地方のニュースをお伝えします

天気予報

はじめとして，報道文章の基本とされているものである[6]．ニュースの内容を要約して伝える部分はリードと呼ばれている．リード部分は，「これから述べようとする内容を的確にしかも簡潔に表現して，聞き手に興味を起こさせるとともに，『聞こう』という心構えをつくらせる」[7] ため

[6] 松岡新兒 (1990：144-149)「ニュースのことばの構造改革」，『NHK 放送文化調査研究年報 35』，日本放送出版協会.

[7] NHK 放送研修センター (1990：6)「ニュース原稿とトークの実際」.

のものである．リードは一つの文であることが多いが必ずしも一つとはかぎらない．また，5W1H をすべて含んでいるわけではない．5W1H は，「イツ，ドコデ，ダレガ，ナニ，ナゼ，ドノヨウニ」を指す．リード部分にはこのうち「ダレ（ナニ）ガ」「ドウシタ」の 2 要素と「イツ」「ドコデ」の 2 要素が含まれることが多いようだ．ただし，南(1963：91)によれば，「ドノヨウニ」はリードだけでなく，ニュースの本文に現われるのもきわめてまれだということだ[8]．

本稿で「ニュースの型」というのは，リードとニュース本文に，ニュースの要素がどのように現われるかを，各分野あるいは項目別に，具体的に書き表わしたものである[9]．ニュースの要素の現われ方は，分野によって異なるだけでなく，ニュースが報道される時間によって変わるものもある．たとえば事件のニュースでは，発生した直後には「ナニガ」「ドウシタ」という順序で現われるが，時間の経過とともに「イツ」「ドコ」がそれに先行するのがふつうである．

ニュースの中には，ここでいう「ニュースの型」がはっきりしている項目（1～7 の分野の項目）と型が決められない項目がある．型が決められない項目は，社会・文化の分野に関するニュースである．しかし，毎年繰り返される行事などは，型とはいえないがほぼ同じ表現が使われていることが多く，今後もっと細かい項目に分けて考えてみる必要がある．政治・裁判関係の分野については，今回は取り上げていないが，松岡(1990：152)が，「裁判関係のニュースは逆三角形の形にはまりにくい」といっているように，この分野も型が決められない項目であろう．

ニュースの型には二種類あって，一つは表 3 のようにニュースの型の中にあてはめて使われる語彙がニュース要素毎にだいたい決まっているもの（1～6 の分野の項目）と，表 4「調査結果の報告」のように枠組みになる表現はどのニュースもほぼ同じであって，そこに使われる語彙が，そのニュース（調査の内容）によって異なっているものとがある．両者ともにニュースの流れは「1.

表 3　ニュースの型 1（事故―飛行機事故）

1.　リード（事故の概要）
① 時　② 場所　③（　～）航空機が　④ 事故の種類
2.　本文
① 情報源 ② 航空機の詳細 ③ 時刻の詳細 ④ 事故の詳細，乗客・乗員の安否
3.　その他
① 空港当局者・警察などの発表

[8] 南不二男(1963)「ニュースの文章構造（放送のことばの研究――ラジオの文と文章について (5)）」，『文研月報』2 月号，日本放送出版協会．

[9] 分野別の「ニュースの型」分析は，菅野(1957：15)の「ニュース文章の構成が同じ型をとるのは，伝達内容が同種類のものに限られている」という指摘も参考にしている．

表14　ニュースの型 2（調査結果の報告）

1. ヘッドライン（調査の概要）

～によりますと	～ています ～ました
～　ことが	～の調査でわかりました
～　は	～の結果をまとめました

2. 調査した機関と対象

この調査は	～が	（～を対象に）	行った 調べた まとめた	ものです

3. 調査結果

それによりますと			～となっています ～ことがわかりました
これを	～に比べると	～となっています	
～をみますと	～がもっとも多く，ついで	～などの順になっています	

4. 分析

これについて こうした結果について	～では	～	とみています と話しています としています
この結果	～（ということ）が		わかりました 裏付けられました

注：上記の2と3をまとめて次のように言うこともある

〈調査機関〉のまとめによりますと	～		
	～〈調査結果〉		になりました ということがわかりました

リード，2. 展開（詳細），3. まとめ」のようになっている．ただ，前者のニュースは，ときには1のリード部分だけで2, 3が省略されることがあるが，後者は2, 3が省略されることはほとんどない．

なお，このニュースの型や，それにそって分類した語彙については，現在製作中の教材に詳細をのせることにしている．語彙については，国立国語研究所「高校・中学教科書の語彙調査分析編」(1989)，土屋(1992：1-17)の「社会科教科書の文化基幹語彙」なども参照している．

1-3-3.　ニュース文

はじめに，ニュース文の特徴の中で，教材化に際して配慮した点について簡単に触れる．

まず，日本語教育の初級で学習はするが，既習の用法とは違う使い方をすることばや表現に注意した．その一例として，つなぎの「が」がある．ニュースの中では「が」は順接のつなぎとして使用されることが多く，逆接のつなぎとしては「～(する)ものの」が多く使われている．次に，中級のはじめではまだ未習と思われるが，ニュースでは多用されるものに，連用中止形による文

と文の接続がある．なお，石野 (1972：31-33) によれば，文の接続における「が」と連用中止形の使用は，ともにラジオよりテレビの方が頻度が高いということである．また，初級で学習した場合とは違う形で使用される表現の一例として，伝聞の呼応表現である「～によれば～ということです」が，ニュースの中では「～によりますと～です」というように，必ずしも述語に伝聞観測や推定の表現をとらずに使われることがあることをあげておく．

一般に日本語は，特に書きことばでは，同じことばを一つの文章中に使うことを避ける傾向にあるが，ニュースにおいてもその傾向があり，それが語彙を複雑にしている原因の一つになっている．菅野 (1978：21) は昭和9年当時のラジオニュースの文末表現について，「『産業ニュース』では文末の表現形式に変化がとぼしく，画一的」であり，「変化の多いものの方がかた苦しさが少なく親しみやすい」といっている．このような考え方は文末表現についてだけではなく，ニュースを書く場合の一般的な考えのようである．たとえば長期予報の中で，いずれも9月に入ってからの暑さについて，「きびしい暑さ，きびしい残暑，猛暑」などといろいろな表現を使っている．

以上はニュースが聴解教材としては「難しい」例であるが，逆に理解を容易にしている要素もある．

ニュースの読み方についてであるが，文字化した文のうち50件のニュースに，読み手が息つぎをしたところや区切ったところを書き込んでみたところ，個人差もあるが，かなり文を区切って読んでいることがわかった．例として一文をあげる．長いポーズを「／」で，短いポーズを「、」で示すと次のようになる．

「次に、東海道新幹線は／きょう、午後、4時半ごろ／東京と、新、横浜との間で／停電、事故のため、一時不通になりましたが／下り線は、およそ、30分後／また、上り線も、50分後に、運転を再開しました.」このように，意味の単位でかなりポーズをおいて読んでいる．

H. クラーク・E. クラーク (1977：60-70) は，「言語音知覚の単位は構成素と一致する」という Fodor & Bever の説を引用し，「聞き手は話が耳に入ると，即座にそこから構成素をとり出そうとする」ので「話が最初から構成素に分かれている」こと「大きい構成素の間に休止があること」が理解する上での助けになるといっている．このように考えると，文字化するとかなり長い文でも，読み手の区切り方によっては聞き手の理解が容易になるのではないかと思われる．

また，速さについても一般に考えられているより遅く，むしろニュース以外の独話のほうが速いという臼田 (1980：29) の報告がある．ただ，臼田も指摘しているが，上記の例でも分かるように，文のはじめに比べて文末はあまり区切らずにいっきに読んでいる．これはどのニュースにも見られる傾向のようで，文末の読みが速いことが「ニュースは速い」と感じさせているのではないかと思う．

もっとも，放送文化研究所の最上氏によれば，アナウンサーの読みは以前よりずっと速くなり，以前は1分間300～330字が基本であったのが，現在では400字が基本になっているという

ことなので，ニュース以外の話し方との比較は現在ではあてはまらないかもしれない．

2. 聴解授業への適用

以上みてきたように，ニュースの聞き取りを助けるには，いろいろなニュースの要素を考えるべきであるが，その中で最も大切なのは語彙の問題だと考えられる．

語彙は興味さえあれば，あるいは必要であれば，どんな段階でも覚えることができるのであるから，専門的なことばを早く覚えたいという気持ちがある学習者には，ニュース語彙はちょうどよい教材になるであろう．また，ニュースのリード部分は比較的文の形が分かりやすいので，リード部分を使ってニュース語彙の聞き取り練習ができるであろうと考えた．そこで，大学予備課程である東京国際大学留学生別科(以下別科と称す)の初級後半のクラスでニュース語彙だけを導入する授業をすることにした．

さらに，東京国際大学学部留学生（以下学部留学生と称す）には，「ニュースの型」を用いたニュースの授業を行うことにした．

本稿では，別科における授業の詳細は省略し，結果だけを簡単に報告することにする[10]．

2-1. 別科初級後半クラスへのニュース語彙導入とその結果

ニュース語彙を導入したのは91年度のクラスである．入学時に初級後半クラスに入った12名の学生に前・後期を通じてニュース語彙の指導を行った．ここで，初級後半というのは，単文に関してはいちおう初級の知識をもっている学生という意味である．

実力テスト問題は毎年その年度の学生に合わせて作成しているが，たまたま90年度，91年度の該当クラスの試験には，ニュースの部分とその他一部を除き同じ問題を使用した．そこで，両年度の学生のニュース聞き取りの成績の平均値の差を検定することにより，ニュース導入の効果を分析することができると考えた．差を検定したのは，9月からの試験3回についてである．つまり，前期から行っていたニュース語彙導入が，中級段階に入った後期の学生のニュース聴解力にどのような影響を与えたかを知ることができると考えたのである．ただし，この授業は実験として行ったものではないため，統計分析の資料としては不充分な点が多い．ここでは，90年度，91年度のテストで使用したニュースの難しさには差がないものとして，両年度の平均値の差について t 検定を行ったところ，いずれも 1% 水準で有意になった．

このことから，91年度の学生のニュース聴解力は90年度の学生のニュース聴解力よりも高いということがいえ，ニュース語彙導入の効果がはっきりした．

---

[10] 別科におけるニュース語彙導入についての詳細は，『日本語教育』第79号掲載論文「初級段階でのニュース教材の導入」参照．

2-2. 学部授業への適用

学部留学生の聴解として最も重要になるのは，講義を聞き，ノートをとる力をつけるということであろう．筆者もそのような観点から毎年講義を聞くことを最終目標として，テレビ・ラジオから種々の番組を教材に利用しているが，90年度には，89年からはじめたニュース分析の結果をいかし，いくつかのニュースの型を自主学習教材として使用することにした．ニュースの型の中でも特に「調査結果の報告」を中心に練習教材を用意した．「調査結果の報告」は，1-3-2でも述べたように，枠になるいい方がほぼ一定で，その枠の中に入る語彙は調査の種類によって政治，経済，文化などさまざまに変わるという特徴をもっている．したがって，学生の興味や必要に応じて自由に選択できる自主学習に適している．その他にこの教材の利点は，各種調査の結果なので，日本人の考え方や，その時々の社会状況が分かり，情報としても学生の興味をひくものだということである．

学生の反応が良好であったので，91年度には教室授業にも組み込み，調査結果の報告だけを教材として使用することにした．そして，次の仮説をたてた．

表 5 1991年度東京国際大学

	国籍	プレース	ニュース 1	提出 1	提出 2	ニュース 5	講義テスト	最終テスト
		100	100	100	100	100	100	100
01	中国	56	80	60	90	100	90	56
02	香港	20	10	50	90	55	30	20
03	中国	38	60	60	90	68	60	38
04	中国	56	15	60	90	70	45	56
05	中国	45	45	80	100	75	90	45
06	韓国	68	80	0	60	75	75	68
07	韓国	31	82	90	70	55	45	31
08	中国	49	48	95	80	68	45	49
09	中国	26	20	90	50	35	20	26
10	中国	35	40	10	50	50	55	35
11	中国	71	50	90	60	70	80	71
12	中国	55	62	0	50	26	15	55
13	中国	43	26	80	90	85	80	43
14	中国	46	50	60	100	100	97.5	46
15	中国	37	30	90	0	40	35	37
16	マレーシア	47	30	0	0	21	35	47
17	台湾	54	38	70	95	60	75	54
18	韓国	25	25	80	80	50	37.5	25
19	ミャンマー	54	20	60	80	80	50	54
20	台湾	57	30	60	0	30	25	57

仮説 1：「ニュースの型」を使った授業は，他のニュースにたいする聴解力も向上させる．

仮説 2：「ニュースの型」を使った授業は，ニュース以外の聴解力も向上させる．

もっとも，この授業は，1年のカリキュラムの中での授業計画であって，実験として行ったわけではない．

2-2-1. 「ニュースの型」を教材とした授業

前述のように，聴解授業全体のシラバスの中の一つの項目としてニュースを取り上げたのであるが，ここではニュース聞き取りの授業だけについて説明する．

なお，1年間に行った聴解テストのうち，プレースメントテスト，ニュースのテスト(1回目と5回目)，講義を聞く練習をした後の確認テスト，提出物の評価1・2，最終テストの成績の七つをまとめて表にしたものが表5である．

○ 1回目

① ニュース学習に入る前のテスト(表5ではニュース1と表示)．

学部留学生聴解試験成績表

	国籍	プレース	ニュース1	提出1	提出2	ニュース5	講義テスト	最終テスト
		100	100	100	100	100	100	100
21	中国	38	50	50	0	30	17.5	38
22	台湾	42	30	50	80	72	35	42
23	台湾	49	15	80	95	60	25	49
24	台湾	21	0	80	90	30	0	21
25	マレーシア	73	75	90	90	95	90	73
26	香港	64	50	90	80	62	50	64
27	台湾	64	30	50	0	40	40	64
28	台湾	48	20	70	70	10	20	48
29	台湾	83	60	0	50	60	60	83
30	中国	51	50	50	50	20	10	51
31	マレーシア	72	80	90	90	80	85	72
32	台湾	72	65	0	90	60	50	72
33	中国	60	70	70	90	80	90	60
34	台湾	56	70	50	70	75	65	56
35	マレーシア	71	60	0	50	60	65	71
36	台湾	68	40	0	50	50	70	68
37	中国	61	48	90	90	65	70	61
38	マレーシア	61	70	0	0	50	15	61
39	中国	42	50	0	90	60	15	42

② 教室で「ニュースの型(調査結果の報告)」の提示.

a. 内容が同じような二つのニュースを続けて聞いて，両者に共通した表現をひろう．この場合は「留学生の日本企業への就職」(89/8/16),「新卒者の就職」(89/8/18) を使用．学生同士チェックし合う．

b. 別のニュースのスクリプトに，「ニュースの型」部分を示したラインを入れたものを渡し，見ながら聞いて，調査の報告の文の流れを確認する．「総理府読書調査」(89/10/22) 使用.

c. 決まった表現，よく使われる語彙を導入する.

d. はじめに聞いた二つのニュースにより，メモをとる練習.

e. 同じニュースを内容確認の問題を解きながら再度聞く．最後にスクリプトも渡し，見ながら聞く.

③ ニュース内容についての感想・意見.

④ リスニングルームにおける自主学習用教材を渡し，指示する．指示内容：必ず聞く部分と選んで聞く部分・各自の自己チェックの方法.

⑤ 個別指導を望む学生の希望時間を調査する.

○ 2回目

① 前回教室で聞いたニュースと同じ語彙が多いニュースを選びテストする(テスト2)．この場合は「大卒女子就職調査」(89/8/21) 使用.

② 前回のテスト(ニュース1)を返し，全員で聞きながらチェック，質問を受ける．ニュース内容についての意見・感想，自国の状況と比べる.

③ 別のニュースを聞くための語彙の導入後，内容確認の問題，音の聞き取り問題を解きながら聞く．「卸売り物価」(89/8/15),(90/5/24),「日銀短期経済観測調査」(91/6/11) 使用.

④ 自主学習用教材について質問を受ける.

⑤ 授業以外の日に自主学習したものを提出する日を設定(提出1).

以上の手順を繰り返して行った.

授業にあたって考慮したことは，ニュースの聞き取りは，討論の動機付けなどのための聴解と違って正確に音を聞き取ることを目的とすること，授業で行う聴解はテストではなく，導入したことばが別の文の中，違う人の発音であっても聞き取れるかどうかの練習だということである．したがって，技術的にはさまざまな手段を講じるが，基本的には未知語の聞き取りや類推は避ける．学習者は日常生活では常に既知のことばから，全体の内容を掴むことを強いられているので，教室という人工的な場所ではそれを制限して，むしろ学習内容把握の方に重点をおいた．最

終的にスクリプトで不確かなことばを確認させるのも，その意味である．ただし，スクリプトにある語彙全部を覚えさせるという意味ではない．なお，表5で「ニュース 1」となっているのは第1回目のニュースステスト（ニュースの聴解練習をしていない段階）で，「ニュース 5」は最終的にニュースの聴解力をみるために今まで聞いていたのとは違う分野のニュースを聞いたときのテスト成績である．「講義テスト」とあるのは，講義を聞く練習をした後の確認テストのことである．確認テストは，講義を聞く練習をした後，講義形式のビデオを見てノートを取り，自分でとったノートだけを見て問題に答えるというものである．「提出 1, 2」とあるのは提出物について学習度を点数化したものである．「提出」を，テストの点数と同列に並べるのには問題があるかもしれないが，この場合集中的に練習したかどうかを計る目安として同じように統計分析の対象とした．なお，自主学習ではあるが，全員がしなければならない課題も出しているので，提出しなかった学生は零点となっている．

2-2-3. 成績の統計分析

91年度の学部日本語聴解授業を受講した学生は61名だが，今回統計分析の対象としたのは39名である．変数のうち5回のテストを全部受けている学生のみを対象としたためにデータ数が少なくなった．

まず，七つの変数の相関係数を求めたところ（表 6）「ニュース 5」と「講義テスト」，「ニュース 5」と「最終テスト」の相関係数が高いので，両者の散布図を作成した（図 1, 2）．図 1, 2 には回帰直線を図示した．「ニュース 5」の「講義テスト」にたいする t 値は 8.22 で，1% 有意である．「ニュース 5」の「最終テスト」にたいする t 値は 6.66 で，これも 1% 有意である．

変数同士の相関係数の値が低いものに，プレースメントテストと最終テスト，ニュース 1 と最終テストなどがある．これは，入学時のテスト成績は1年後の聴解力とはほとんど関係がないということを示す．

ニュース 1 とニュース 5 の相関係数は 0.40 と低く，提出 2 とニュース 5 の係数値が 0.61 であ

表 6 相 関 係 数

変 数	ニュース 1	ニュース 5	講義テスト	提出 1	提出 2	プレースメントテスト	最終テスト
ニュース 1	1.0000	0.4074	0.4789	−0.2117	0.0346	0.5310	0.2022
ニュース 5	0.4074	1.0000	0.8039	0.2103	0.6147	0.3003	0.7381
講義テスト	0.4789	0.8039	1.0000	0.1676	0.4289	0.4620	0.5728
提出 1	−0.2117	0.2103	0.1676	1.0000	0.3450	−0.2869	0.3995
提出 2	0.0346	0.6147	0.4289	0.3450	1.0000	−0.0654	0.5406
プレースメントテスト	0.5310	0.3003	0.4620	−0.2869	−0.0654	1.0000	0.2779
最終テスト	0.2022	0.7381	0.5728	0.3995	0.5406	0.2779	1.0000

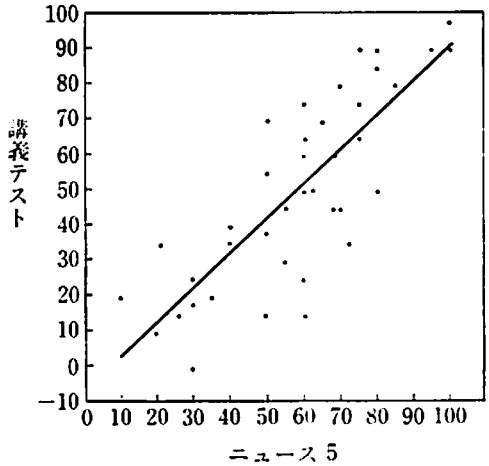

図1 ニュース5と講義テストの散布図

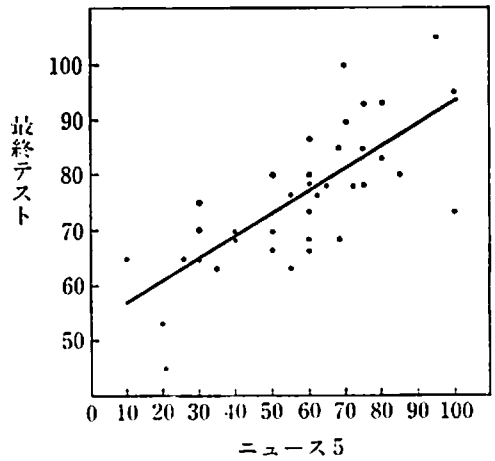

図2 ニュース5と最終テストの散布図

るということは，1年後のニュース聴解力を伸ばすものは，学習を始める前の聴解力ではなく，学習の量であること，すなわち，自主学習を行った場合には効果があることを示している．

以上みたとおり，ニュース学習とニューステスト，最終テストの相関が高いということから，「『ニュースの型』の学習はニュースおよび他の聴解力を向上させる」という仮説は肯定できるであろう．

ここで注目すべきことは，「ニュース 5」と「講義テスト」の相関値が一番高いことである．「ニュース聴解力が高い学生は，講義を聞いて内容を把握する力も高い」ということの理由を考えてみると，ニュースの語彙が講義の語彙と重なったということも考えられるし，ニュースのリード部分を聞いてから本文を聞くことにより，内容要約の練習になったということも考えられる．

2-2-4. 今後の課題

東京国際大学には3学部，6学科があるが，教室での授業の教材内容は経済的内容にかたよりすぎたきらいがあった．ただし，学生からの不満はなかった．学生の興味の違いや，聴解力の差を考え自主学習に重きをおきたいと考えているが，中にはそのために手を抜く学生もいて（他人の答えを写す，提出しないなど）教師の意欲をそぐこともあった．しかし，提出点が低い学生の聴解力はのびないという結果がはっきり現われている．学習者一人一人に学習意欲を起こさせるような魅力的な教材を作る必要を痛感した．

また，講義とニュース聴解力との高い相関関係はたいへん興味深い．今後はニュースと講義の聴解力との関係について，もっとコントロールされた条件のもとで観察してみたい．

3. おわりに

初級聴解教材から中級聴解教材へ移るときの教材の差の大きさが問題となっている．ということは，初級の聴解教材と中級のそれとはばらばらに考えられていて，一つの大きな体系の中で考えられていないということであろう．ニュースにしても，中級からニュース教材をきくためにはやはり初級教材からどのように力をつけていくかを考えなければならないと思う．別科のクラスでみたように，初級クラスへのニュース語彙導入が中級段階に進んだ際のニュース聴解力を高めるという結果は，それにたいして一つの示唆を与えてくれるだろう．

ニュースには，聴解教材として用いるためのいろいろな利点がある．まず，一つのニュースの長さが短く，長くても2,3分であるため，一コマの間にいくつかの違うニュースを聞くことができること，現在起こっていることであるから，学習者がそのニュースについての知識を持っていると考えられること，訓練されたアナウンサーが読む場合が多いので，速くても比較的聞き取りやすいこと，などをあげることができる．次に，冗長性の問題を考えてみる．一般に，日常的な会話のように，知っていることばから話の内容を推測できる場合をのぞき，整った文のほうが内容を理解しやすいと考えられる．重松 (1986：61, 65, 68-70) は，講義のスタイルを分析し，挿入句，繰り返し，言い直し，言い癖が多い講義の場合，留学生の内容理解が困難になることを指摘している．中級段階での練習として，ニュースのように整った文を正確に聞き取ることは必要なことだと思う．

一般に，ニュースは新しい情報を得るために聞くものであるから，古いものは価値がないという考えがあり，ニュースの生教材を準備するため教師は毎日毎日ニュースの教材化に追われることになる．しかし，学部留学生の場合にみたように，ニュースを聞くことにより他の聴解力も強化されることを考えに入れ，全体の聴解シラバスの中のどこにニュースを位置づけるかを考えるべきであろう．

謝 辞

NHK 放送文化研究所副部長，前川佐重郎氏，ならびに NHK 放送文化研究所放送研究部副部長の最上勝也氏には参考資料を紹介していただいた．最上氏には，ニュースについての最近の事情もお教えいただいた．また，東京国際大学経済学部専任講師定村薫先生には，統計分析の方法，および分析結果の解釈についてご指導いただいた．あわせて心から御礼申し上げたい．

参 考 文 献

浅井真慧 (1987)「放送用語の調査研究の系譜」，『NHK 放送文化調査研究年報 32』，日本放送出版協会．
石野博史 (1972)「文の長さ——ローカルニュース文章の分析」，『文研月報』11月号，日本放送出版協会．

岩井勇児，鈴木真雄 (1985) 『教師のための統計法入門』，福村書店.
臼田　弘 (1980) 「ニュースと朗読の読みの速さ」，『文研月報』7月号，日本放送出版協会.
菅野　謙 (1957)「放送ニュースの文章構成」，『NHK 放送文化調査研究年報 2』，日本放送協会.
――― (1970) 放送基本語彙調査報告 25「ニュースの中の形容詞」，『文研月報』8月号，日本放送出版協会.
――― (1968) 「漢字から見たラジオニュースの用語」(1)，『文研月報』9月号，日本放送出版協会
――― (1970) 「電子計算機による放送用語の研究」，『NHK 放送文化調査研究年報 15』，日本放送協会.
――― (1978) 「天気はよろしゅうございますが――昭和初期の放送用語」，『文研月報』2月号，日本放送出版協会.
菅野　謙，石野博史 (1968) 「ニュース文章の分析方法について」(1)，『文研月報』12月号，日本放送出版協会.
――― (1969) 「ニュース文章の分析方法について」(2)，『文研月報』2月号，日本放送出版協会.
クラーク，H.，クラーク，E. (1977) 『心理言語学』上巻，藤永・小菅・酒井・秦野訳，新曜社.
グリーン，J. (1989) 「言語理解」，『認知心理学講座 4』，長町三生監修，海文堂.
国立国語研究所・放送文化研究所 (1962-63) 「放送のことばの研究――ラジオの文と文章について」(1)～(6)，『文研月報』10月号～3月号，日本放送出版協会.
国立国語研究所報告 99 (1989) 「高校・中学教科書の語彙調査分析編」，秀英出版.
重松　淳 (1987) 「大学講義のスタイル分析」，『日本語と日本語教育』16号，慶応大学国際センター.
鈴木庸子，横田順子 (1992) 「テレビニュースを中心とした日本語学習用コースウエアの開発」，『日本語教育』76号.
土屋信一 (1991) 「文化語彙の探索――共出現からみた社会科教科書」，『共立国際文化』創刊号，共立女子大学.
日本放送協会 (1990) 『アナウンスセミナー』，日本放送出版協会.
長谷川潔，関根応之 (1973) 『放送英語』，朝日出版社.
長谷川潔，住友公一 (1986) 『放送英語の利用法』，大修館書店.
波多野誼余夫編 (1982) 「学習と発達」，『認知心理学講座 4』，東京大学出版会.
文化庁文化部国語課 (1978) 「外国人にたいする日本語教育の振興に関する報告集」.
湊　吉正，木村圭子 (1964) 「『話しにくいことば』の調査とその分析」，『NHK 放送文化調査研究年報 9』，日本放送協会.

Carter, R. and M. McCarthy. 1988. *Vocabulary and language teaching*. New York : Longman.
Nation, I.S.P. 1990. *Teaching and learning vocabulary*. New York : Newbury House.